

1978年夏期講習の御講話(14)

人は常に付き合う仲間によって 良くも悪くもなる

西洋の教育は、私たちの行動や文化に多大な影響をもたらした

〔そのせいで〕国民は墮落してしまった

私たちの伝統はすっかり干からびてしまった

彼らは、着るものやその他の習慣を変えてしまった

彼らは、自分の母親や妻に話しかけることを喜ばない

彼らは、年長者の行動規範に敬意を表するのは間違っていると考えている

ひどい状況になってしまった

バーラタ〔インド〕の現状について、私に何が言えるだろう？

自分の力を知らない象のように、

バーラタの国民は自分たちの文化の力を知らないのだ

人間の人生は虫だらけのベッドです。それは世間に蔓延するあらゆる病気の温床です。人生で喜びを感じ、幸福を見つけるには長い旅をしなければなりません。

学生諸君、青年男女の皆さん、私たちの神聖な国バーラタは、たくさんの言語、伝統、卓越した文化で満ちあふれた、素晴らしい国です。バーラタで栄えている多種多様な言語や宗教は、他のどんな国にも見られないものです。変化を取り入れ、この偉大な国を改善するために、古の聖人やリシ〔聖仙〕たちは、神聖なヴェーダやイティハーサ〔古伝説〕やプラーナ〔神話集〕を授けてくれました。この国の真のバックグラウンド〔背景・生い立ち〕とその文化は、バーガヴァタとマハーバータの物語の中に現れています。

私たちはこれまで 14 日間バーガヴァタの物語を聞いてきました。事実、これは私たちの偉大な文化の物語であることに気付かなくてはなりません。ヴェーマナ〔17 世紀のテルグの詩聖〕は、塩と樟脳はよく似ていても、味はいはまったく違うと言いました。真鍮と金は、見た目はそっくりですが、下に落としてみると、まるで違う音がします。それと同じように、神性という相が人間の姿をまとった場合、その御姿の行動と普通の人間の行動は、表面的には同じように見えます。

母ヤショーダーは、クリシュナを寝床に寝かせ、子守歌を歌いながらその恍惚に浸っていました。彼女は長い時間をかけてクリシュナを寝かしつけようとしていました

が、どれほど頑張ってみても、クリシュナは眠りませんでした。なぜクリシュナは眠ることができないのだろうと不思議に思い、彼女は眠りの女神に助けを求めて祈ることさえしました。無欲で神聖な行動はすべて、主のリーラー〔遊戯〕であると見なすことができます。しばらくして、ヤショードーはクリシュナが眠っているのに気がつきました。しかし、実際には、クリシュナは眠ったふりをしていただけでした。

ヤショードーは召し使いに静かにするように言いました。彼女はクリシュナに語りかけました。「おまえの中に全世界が包み込まれているというのに、誰がおまえのために邸宅を建てたりできるでしょう？ おまえは百万の太陽の光ほどに輝いているというのに、誰がおまえに光を見せたりできるでしょう？ おまえ自身の中に万物が含まれているというのに、どうして私たちにおまえを知ることなどできるでしょう？」

しかし、ヤショードーは母であり、たとえクリシュナがパラマートマ〔至高のアートマ〕であったとしても、どうしても母の情愛が現れてくるのでした。誰にもマーヤー〔迷妄〕の影響を理解することはできません。愚かな人々は、マーヤーの中に生まれ、マーヤーの中で育ちますが、マーヤーの側面を理解できないのです。すべての命はマーヤーの結果にすぎず、生と死もマーヤーの結果です。あらゆる執着はマーヤーの結果であり、人生はマーヤーに満ちています。人は眠っている人を一瞬で起こすことができます。また、起きている人は起こす必要がありません。しかし、眠っている振りをしている人を起こすことのできる人がいるのでしょうか？ それと同じように、ヤショードーはクリシュナにこう言って話しかけました。「もし眠っている振りをしているなら、誰がおまえを起こすことなどできますか？ 眠った振りはおやめなさい」。デーヴァやデーヴァター〔天界の神々〕たちはこの会話を見ていて、ヤショードーは最も幸運な人物だと語り合いました。なぜなら、ヤショードーは主と遊ぶことができたからです。

別のある時、ちょうど眠っていたクリシュナが目を覚ましかけていたとき、ヤショードーがやって来て、子守歌を歌いました。

四つのヴェーダをゆりかごの四隅に置いて、
九つの宝石でおまえのゆりかごを飾りましょう
コブラの王がゆりかごの中のおまえを守るでしょう
これはオームカーラ〔聖音オーム〕のゆりかご、その中に
タットワマスィ〔汝はそれなり〕の形をした寝床を敷きましょう
おまえは七つの世界のすべてを象徴しており、
それらはおまえの中で一つです

そのようなゆりかごの中で、おまえは静かに眠ることでしょう

(テルグ語の唄)

母ヤショーダーはクリシュナが全能の神であることをよく知っていました。それでもなお、よくこんなマーヤー〔迷妄〕に巻き込まれていたのです。

クリシュナはナンダの家ですくすくと成長し、家の周りで動き回って遊ぶようになりました。母ヤショーダーはいつもクリシュナに愛着があり、クリシュナの世話を焼いていました。あるとき、何人かのゴープーカーたちがクリシュナの様子を尋ねに母ヤショーダーの所へやって来ると、クリシュナは鏡の前に行き、鏡に映った自分の姿にバターを食べさせている振りをしました。それはまるで、とてつもなく無邪気であるかのようでした。母ヤショーダーは、クリシュナのあまりの無邪気さにとても驚きました。クリシュナのあらゆる行為は、実に幼い無邪気な者がしているように見えたが、それでいて人々を大いに驚かせました。

クリシュナは母の所へやって来て、なぜ自分の髪は兄の髪のようにきれいに伸びないのかと尋ねました。母はクリシュナを満足させるために、もし牛乳をたくさん飲んで、たくさんバターを食べれば、クリシュナの髪もきれいに伸びるはずだと言いました。数日後、クリシュナはまた母の所へやって来て、なぜたくさんの牛乳を飲み、たくさんのバターを食べているのに、自分の髪は伸びないのかと尋ねました。母はこれに少し手厳しく答えて言いました。「おまえの兄さんは、自分がもらった沸かした牛乳を飲み、自分がもらったバターだけを食べている。勝手に盗んだりせずにね。おまえはいつも待ちきれず、私が絞ったとたんに牛乳をパッと持ち去ってしまう。それにおまえはバターが出来上がる前にバターが欲しいと泣き叫ぶ。兄さんはとても忍耐強くおとなしいけれど、おまえはそうじゃないわ!」。そう言ってヤショーダーはクリシュナを戒めました。その日から、クリシュナは母に牛乳を求めることはしないと決め、近所の家に行き牛乳を求めるようになりました。クリシュナはラークシャシー〔羅刹女〕のプータナーを殺すような数多くの珍事をやってのけたので、村中の人々から慕われ、誰もがクリシュナを愛していました。どの家に行ってもクリシュナは快く歓迎され、その日からまた盗みも増えたのでした。

ヤショーダーはよくゴープーカーたちから不平を言われていました。ある日、ヤショーダーはクリシュナを捕まえ、こう言って諭しました。「おまえは自分が与えられたものを食べないで、他のゴープーカーたちの家に行きバターや牛乳を盗んでいるのね。おまえは幼い少年だけれど、口の中からバターの匂いがぷんぷんして村中の人たちが文句を言っているのよ」。このように、ゴープーカーたちは常にクリシュナについてぶつぶつ不平を言っていました。私たちはクリシュナの行為の内なる意

味を理解しなければなりません。「ナヴァニータ」〔出来たばかりの新鮮で柔らかなバター〕という言葉は、「純粋なハート」を意味します。ここでの純粋なバターは純粋なハートに例えられます。「クシーラ サーガラ」は「乳海」という意味で、サムサーラ〔世俗／輪廻転生〕は「大海」とも呼ばれます。クリシュナの行為は、サムサーラの海に浸っている人々の純粋できれいなハートを盗む、という意味に解釈すべきです。このように、クリシュナの行為には深い意味があるのです。

ある時、クリシュナが普通の子供のように泣きながら母の所へやって来ました。なぜ泣いているのか、母ヤショーダーがわけを尋ねると、クリシュナは、兄のバララーマがいつも難癖をつけてきて、ちゃんと遊んでくれないから悲しいのだと言いました。クリシュナとバララーマにはある種の意見の衝突がありました。遊んでいる時、いつもバララーマはクリシュナに、おまえは本当にヤショーダーの息子なのかと尋ね、さらに、他の子供たちの前で、実はクリシュナはヤショーダーが他の母親から買ってきた子供で、本当はヤショーダーの息子ではないのだと言って、侮辱していたのです。このことはクリシュナを傷つけ、クリシュナはいつも、自分はナンダとヤショーダーの息子なのだと言いつ張りました。するとバララーマは、色白のナンダとヤショーダーの実の息子なら、なぜクリシュナの肌の色は黒いのかと尋ね返してきました。そして、クリシュナが本当にナンダとヤショーダーの息子なら、クリシュナも色白であるはずだと異議を唱えていました。クリシュナは、そうした口論があると、それを母ヤショーダーのところに持って行って、泣き始めるのでした。それを見ると、ヤショーダーは深く心を動かされ、バララーマはいつも焼きもちを焼いているから、そのような作り話ばかりしているのだと言いました。ヤショーダーは、自分はまぎれもなく母であり、クリシュナは息子であると断言しました。

ここで私たちは、ヤショーダーが、クリシュナは自分の息子だとも、自分はクリシュナの母親だとも言っていないことに気づかなくてはなりません。そのとき、疑っていたのはバララーマでした。友人たちはそこから情報を得ようとし、ヤショーダーは情愛の権威を認めようとししました。私たちは、そこではダルマやヴェーダに由来する真実に基づいた本質的な証言は用いられていなかったことに注目すべきです。各人が、その時々で、自分独自のプラマーナ〔尺度／認識手段〕を用いていました。しかし、主要な権威〔根拠〕とすべきは、五感すべての体験を伴うプラティヤクシャ・プラマーナ〔直接体験〕です。クリシュナは、プラティヤクシャ・プラマーナ〔直接体験〕だけが信頼でき、重要であることを世に示したのです。

人間は、常に付き合う仲間しだいで良くも悪くもなります。それゆえ、神聖な仲間に入れば神聖な性質を手に入れるでしょう。小さな例があります。もしどこかで

蛇を見かけたら、私たちは有害なものに見なし、殺そうとするでしょう。しかし、蛇がイーシュワラ〔シヴァ神〕と一緒にいれば、それを理由に礼拝し、敬意を払うでしょう。ウパニシャッドは、良い性質と悪い性質は私たちが付き合う仲間の性質から得られる、と教えています。もしどこかの片隅にネズミを見かけたら、私たちはすぐに罠を仕掛けて殺そうとするでしょう。しかし、ヴィナーヤカ〔ガネーシャ神〕の乗り物（ヴァーハナ）となっているネズミが目に入れば、そのネズミにお辞儀をするでしょう。一緒にいる者を理由に、私たちはそうするのです。

悪い性質もこれと同じようなものです。もし大鍋いっぱい牛乳に数滴のお酒を落としたら、牛乳そのものが悪くなります。同様に、神聖なものとされる火は、鉄の塊と接触しているとハンマーで打たれます。このように、私たちは悪い仲間から困難や悲しみを受け取り、良い仲間からは良い結果を受け取るのです。一塊の鉄を土の中に投じると、鉄は錆びてすっかり価値を失います。しかし、その同じ鉄を火の中に入れるなら、不純物がなくなり、明るい輝きが得られます。それと同じように、人間は付き合う仲間によって変わります。ほこりが風に吹かれれば、飛ぶための翼はなくても高く舞い上がります。その同じほこりが、水と交われれば、最も深く深いところまで落ちていきます。ほこりには、下に降りていく足もなければ、舞い上がるための翼也没有ありません。このように、私たちの付き合う仲間こそが、私たちが上昇するか下降するかを決めるのです。

知ってのとおり、良い仲間は穏やかで平安な人生をもたらします。だからこそ、年長者たちは良い仲間を持つようにと言うのです。バララーマとクリシュナは、どちらも神性の両面〔グニャーナとバクティ〕を内に持っていますが、一方はグニャーナ〔英知〕の道をたどり、もう一方はバクティすなわち信愛の道をたどります。バララーマとクリシュナとの間で、両方の道が世に示されているのです。そのため、二人は時折、大いに相反する行動をとるのです。グニャーナ・マールガ〔英知の道〕は人の智慧に関連し、バクティ・マールガ〔信愛の道〕は人のハートに関連しています。

あるとき、クリシュナはスバドラー〔クリシュナの妹〕をアルジュナと結婚させたいと思いましたが、バララーマはこれに賛成しませんでした。クリシュナの行動は、彼の思いと言葉と行動の一致を示すものでした。「人間の研究対象は人間である」と言われていますが、クリシュナには常にそのような一致がありました。クリシュナは、いつもアルジュナを自分の義理の弟と呼んではいましたが、アルジュナが結婚して実際に身内になったわけではないのにそう呼び続けるべきではないと感じていたのです。これに関連して、もしあなたが演壇に上がり、聴衆に「兄弟姉妹である皆さん」と呼びかけても、それは実に表面的な声明であり、真実を反映していません。あなたが本当にすべての人を兄弟姉妹であると見なしたときに、初め

てそう呼びかけるべきです。誰が困難に巻き込まれようと、あなた自身の兄弟姉妹が困難に巻き込まれたときに感じる心配の気持ちがなくてはなりません。もし赤の他人があなたの妹をよこしまな目で見たら、あなたはとても大きな苦痛を感じ、不愉快になるでしょう。他の兄弟姉妹が同じような侮辱や屈辱を受けたときも、あなたは実の妹がされたときと同じように不快に思うべきです。

ですから、自分の口から出た言葉は実践に移されなければならず、思いにおいてもそれと同じことを体験すべきです。今日の学生たちは、思いと言葉と行動の間にある一致を促すよう努力すべきです。このように、クリシュナのリーラー〔遊戯〕は思いを実践に移すものでした。クリシュナは、決してどんな不純な思いも抱いたことはありません。クリシュナは、決してどんな世俗的な思いも抱くことはなかったのです。クリシュナには何一つ欠点はありませんでした。彼は常に純粋な思いを抱いていました。クリシュナは理想的な手本であり、私たちは最終的にクリシュナと一つにならなくてはなりません。

サイババ述

Summer Showers in Brindavan 1978 Ch14